

二〇二三年度

豊島岡女子学園中学校

入学試験問題

(二回)

# 国語

## 注意事項

- 一. 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二. 問題は  から 、2 ページから 19 ページまであります。  
合図があつたら確認してください。
- 三. 解答は、すべて指示に従って解答らんに記入してください。

① 次の①と②の文章を読んで、後の一から九までの各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

①

①なぜ、日本は凋落したのか？

ここでいう「凋落」とは、何も経済力のAタイムイだけ指しているではありません。高度成長期の日本には、活力もあれば文化発信力もあった。それがいまや、何もかもがすっかり影を潜め、自信を失い、まるで坂道をただ転げ落ちていくようにもみえます。

なぜ、このようなことになってしまったのか？

それをいま、テクノロジーだけを追い求めて、リベラルアーツの精神を顧みなかったからと書きましたが、さらに具体的に、『街場の日韓論』(内田樹編、晶文社)という本の中で劇作家の平田オリザが、その原因は「創造力の欠如」であるという鋭い分析結果を紹介しています。

それを指摘したのは、日本政府でも日本の学会でもシンクタンクでもなく、お隣の韓国です。韓国は、二一世紀初頭に、タイムイする日本経済と日本社会を徹底的に研究、分析してその原因を探りました。それは韓国が日本のようにならないためであり、「一説によると、2000年代の十年だけで、日本経済や日本社会の停滞に関するレポートが、様々なシンクタンクから2千本も書かれたと聞いたことがある」(前掲書)というのです。

日本経済はとにかく西洋に追いつけ追い越せで、人まねもうまく勤勉で器用だったために西洋に追いつくところまでは行った。だが追いついた次の段階として、②まだ誰もみていないその先の風景を描けなかった。そして完全に自分を見失い、失速した。なぜか？

「そのレポートに書かれている結論の一つが『クリエイティブティの欠如』だった」（同書）と平田は言います。

（中略）

ここでふたたび、冒頭のステイブ・ジョブズの「テクノロジーとリベラルアーツの交差点に立つ」という言葉を思い起こしてみます。

高度成長期の日本は、たしかにテクノロジーでは世界をリードできたものの、テクノロジーだけを信奉してリベラルアーツの精神が欠落していた。そのアンバランスこそが「失われた三〇年」の正体です。その原因を、韓国は「クリエイティブティ（＝創造力）の欠如」と分析したわけですから。

その分析はたしかに的を「X」います。でもぼくはそれだけではないと思っています。「創造力」だけではない。日本語にはもうひとつの「ソウゾウリョク」もある。そのふたつともが欠けていたのではないかと思うのです。

もうひとつの「ソウゾウリョク」とは何か？

「想像力」です。

「創造力」と「想像力」というふたつの「ソウゾウリョク」。そして、未来へのブランドデザインを描くために何よりも必要なエンジン<sup>えん</sup>は、このふたつの「ソウゾウリョク」ではないのか？ ぼくはそう考えています。

ここまで「創造力」も「想像力」も、まったく同じ発音の語として、あえて「ソウゾウリョク」とカタカナで記しましたが、それにしては日本語がすばらしい言語だと感心するのは、英語では「クリエイティブティ」と「イマジネーション」という人間のあらゆる創造活動の核をなすふたつの言葉が、日本語では、Y奇しくも同じ発音をもつ言葉だということです。それを外国人に話す<sup>かく</sup>と、たいていは驚愕して称賛されます。

彼らには、クリエイティブとイマジネーションを同じ言葉で表現できる言語というものを想像することすらできない。そして「日本語はなんとファンタスティックな言語なんだ！」と感嘆する<sup>かんたん</sup>というわけです。そして、このふたつの「ソウゾウリョク」こそ、

リベラルアーツによってもたらされる最大の果実なのです。

ふたつの「ソウゾウリヨク」が躍動すれば、それが「イノベーシオン（＝新機軸、新結合。新たなアイデアによって社会的意義のある価値を創造すること）」につながる。

現代は、イノベーシオンの時代といわれます。いま、世界を変えている数々のイノベーシオンや斬新なアイデアは、③管理された組織や、日本の大企業の典型である硬直した統制型マネージメントからは、けっして生まれえないということは、もはや明らかです。

かつて世界を席卷した「メイド・イン・ジャパン」が次々と生み出されていた時代、日本はもって「遊ぶ国」であり「楽しむ国」でした。それがいつのまにか、日本はただの窮屈な国になり、つまらない国になったという声が聞こえるようになると、日本からふたつの「ソウゾウリヨク」がどこかに消えてしまったのです。

この章の冒頭に登場したステイブ・ジョブズもそのひとりですが、偉大なイノベーターは例外なく「ホモ・ルーデンス（遊ぶ人）」です。「無駄なことをできる人」であり、「人生を遊ぶ人」であるともいえます。

元日本マイクロソフト社長の成毛眞はこう書いています。

遊びや趣味というのは、意外に仕事の成果につながっていたりする。日本人は真面目に働きすぎて、遊ばないからイノベーシオンを起こせないと、私は事あるごとについているが、実際そうなのだ。（『アフターコロナの生存戦略』成毛眞著、KAD

OKAWA）

あまりにも合理主義、効率主義に偏った社会は、無駄なもの、Bヨケイなものを極力排除しようとはします。ところで「無駄なもの」とは何でしょうか？ たとえば、④ぼくはいま本の森のなかで暮らしていますが、一万冊以上の本のなかに埋もれて片隅で埃

をかぶって記憶にもない一冊の「無駄に思えた本」が、あるとき、なぜかすつと視界に入り、偶然開いたページが人生のピンチを救ってくれたことが何度もあります。そのような不思議を経験してみると、人間の浅知恵だけで「無駄」を選別しようとしたことが、何とも浅はかで傲慢にすら思えてくるのです。

古代中国の賢者・老子に、「無用の用」を説いた有名な言葉があります。

(故に) 有の以て利を為すは、無の以て用を為せばなり。

目先の利益で有用・無用を決めつけてはならない。いまは無用にみえても、のちに必要になることもある。何の役に立っていないようにみえても、どこかで大事な役に立っていることもある、という意味です。

リベラルアーツは、いわば無用の用です。履歴書に書けるような資格でもなければ、出世に役立つとか、そのような意味での有用性はありません。けれども、そのいっけん無用に思えることが、もしかすると人類の未来を救うことになるかもしれない。それほどまでに謎めいていて奥深く、汲めども尽きぬ魅力を秘めているのです。

( 『リベラルアーツ 「遊び」を極めて賢者になる』 浦久 俊彦 )



僕の場合、小さい頃から「散らかしの神」に支配されていた。ときどき、その神様が降りてきて、僕をして僕の周辺を散らかすのである。僕自身はまったくの無意識で、「おやっ」と気づいたときには、周りには散らかり放題、悲惨な状態になっている。身に覚えがないので、「犯人は僕じゃない！」と愕然とするのであるが、幸い、僕の両親は子供に「ちよつと片づけなさいよ」などと言うことは一度もなかった。それはたぶん、\*10 エントロピー増大というか、宇宙の原則を両親が正しく理解していたためだと思われる。

物理学の理解は、このように日常を豊かにする。ありがたいことである。

なにかに熱中しているからこそ、知らないうちに散らかってしまいうけである。だから、もしもその熱中の真<sup>ま</sup>直<sup>ただ</sup>なかで「片づけなさい」なんて叱<sup>しか</sup>られると、子供はその瞬間<sup>しゅんかん</sup>に、物理法則<sup>ぶつりはうそく</sup>への素敵<sup>すてき</sup>な予感<sup>よかん</sup>を断ち切れ、「親の支配<sup>しはい</sup>」という卑<sup>ひ</sup>近<sup>きん</sup>な現<sup>げん</sup>実<sup>じつ</sup>に引き戻されることになる。そして僕<sup>ぼく</sup>のように⑤散<sup>ち</sup>らかしの神<sup>かみ</sup>様<sup>さま</sup>の偉<sup>い</sup>大<sup>だい</sup>な力<sup>ちから</sup>を肌<sup>はだ</sup>で感じることもできなくなるという寸法<sup>すんぽう</sup>だ。

( 『工作少年の日々』 森<sup>もり</sup> 博<sup>ひろ</sup>嗣<sup>し</sup> )

〔注〕 \*1 凋落<sup>ちようらく</sup>⇨おちぶれること。

\*2 それをいま、テクノロジーだけを追い求めて、リベラルアーツの精神<sup>かせい</sup>を顧<sup>かえり</sup>みなかつたからと書きました

⇨筆者はこの箇所<sup>かしよ</sup>より少し前の記述<sup>きじゆ</sup>で、日本凋落<sup>ちようらく</sup>の原因<sup>げんいん</sup>としてこのように指摘<sup>ししてき</sup>している。

\*3 リベラルアーツ⇨「教養<sup>きやうやう</sup>」とか「教育カリキュラム」のような一般<sup>いっぱん</sup>的な理解<sup>りかい</sup>とは異<sup>い</sup>なり、筆者<sup>ひんしや</sup>(浦久俊彦<sup>うらひさとしひこ</sup>)は「人生を遊びつづけるためのわざ」と定義<sup>ていぎ</sup>している。

\*4 シンクタンク⇨様々な分野<sup>ぶんげん</sup>の研究<sup>けんぎゆ</sup>をしたり助言<sup>すけごん</sup>を行<sup>い</sup>ったりするために専門<sup>せんもん</sup>家を集<sup>あつ</sup>めた研究<sup>けんぎゆ</sup>機関<sup>きかん</sup>。

\*5 冒頭<sup>ぼうとう</sup>のステイプ・ジョブズの「テクノロジーとリベラルアーツの交差<sup>かうさ</sup>点<sup>てん</sup>に立つ」という言葉

⇨筆者<sup>ひんしや</sup>(浦久俊彦<sup>うらひさとしひこ</sup>)は本書<sup>ほんしゆ</sup>、序章<sup>しよしょう</sup>の冒頭<sup>ぼうとう</sup>で故<sup>こ</sup>ステイプ・ジョブズ(⇨米アップル社の創業者<sup>そうぎやうしや</sup>の一人)の言葉<sup>ことば</sup>を紹介<sup>しょうかい</sup>している。

\*6 失われた三〇年⇨一九九〇年代から今日までの、日本において経済<sup>けいぎ</sup>の停滯<sup>ていたい</sup>が指摘<sup>ししてき</sup>されている期間<sup>きかん</sup>。

\*7 ファンタスティック⇨ここでは、「非常にすばらしいさま」ということ。

\*8 マネージメント⇨経営<sup>けいぎやう</sup>などの管理<sup>かんり</sup>をすること。

\*9 イノベーター⇨イノベーションを起こす人。

\* 10 エントロピー増大Ⅱここでは、「ものごとは放っておくと乱雑になっていく」ということ。

問一 |線 A「テイメイ」・B「ヨケイ」のカタカナを正しい漢字に直しなさい。

(一画一画でいいにはつきりと書くこと。)

問二 空らん「X」に入る言葉として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 指して                   イ 射て                   ウ 見すえて                   エ 絞しぼって                   オ 描えがいて

問三 |線 Y「奇くしくも」のここでの意味として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 意外にも                   イ かるうじて                   ウ 偶然ぐうぜんにも                   エ 誇ほこらしいことに                   オ 幸運にも

問四 |線②「まだ誰だれもみていないその先の風景を描えがけなかつた」とありますが、「まだ誰だれもみていないその先の風景」と同じ意味で使われている言葉を□の文章中から十二字で探し、抜き出しなさい。

問五 |線③「管理された組織や、日本的大企業だいぎぎやうの典型である硬直こうちよくした統制型マネージメント」はどのような考え方に陥おちいりやすいと言えますか。□の文章中から答えとして適当な言葉を十字以内で探し、最初の四字を抜き出しなさい。

問六 |線④「ぼくはいま本の森のなかで暮らしています」とありますが、その説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 所狭ところせましと大量の本をあらゆるこちに積み上げ、その中で自由に読書にふけりながら生活している。

イ 無駄むだだと判断した本であっても捨てることなく、他の多くの本と同じく大切に生活している。

ウ 大量の本を身近に置き、それらを常に十分に活用し、様々な気づきを得ながら生活している。

エ 自分にとって役立ちそうな本か否かに関係なく、様々な数多くの本に囲まれて生活している。

オ 便利べんりさ一辺倒いっぺんじやうの社会から距離きよりを取り、大量の本の中で多くの時間を読書に費やしながらか生活している。

問七 ー線⑤「散らかしの神様の偉大な力」とありますが、「散らかしの神様」の意義を説いた表現を□の文章中から四字で探し、抜き出しなさい。

問八 □の文章の構成を説明したものとして最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日本の経済成長の停滞の理由を平田オリザ氏の指摘を交えながら筆者なりに分析し、その中で浮上した日本人のなかなか遊びに馴染むことができない国民性を紹介し、歴史的に支持されてきた遊びの価値を主張している。

イ 日本が凋落したという事実をたんに紹介するにとどまらず、韓国の詳細な分析と筆者独自の考えを示すことで、「失われた三〇年」が人為的に作られたものであることを指摘し、日本特有の統制型の経営を批判している。

ウ 日本の凋落の内実を平田オリザ氏の独自の分析を交え紹介するとともに、テクノロジーだけを信奉した日本人の思想的未熟さを指摘し、かつて持っていたはずの、遊びや楽しみを通じた精神のおおらかさの復活を提言している。

エ 日本の経済成長の停滞という事実をきっかけに、韓国の研究心の旺盛さと相対化するかたちで日本人の安易な人まねにおける器用さを紹介し、それだけでは世界に通用する文化的成熟さを示し得ないことを指摘している。

オ 日本が凋落した原因を韓国が指摘していたことを紹介しながら、そこに筆者独自の視点を加味することで問題をより詳しく分析し、日本が失っていたものの中に今後の活路を見出し得るという可能性を示唆している。

問九 ー線①「なぜ、日本は凋落したのか？」とありますが、日本が凋落した理由を筆者はどのように考えていますか。□の文章全体を踏まえて七十字以内で答えなさい。

〔二〕 次の文章を読んで、後の一から九までの各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

養護施設「白百合天使園」園長の小原純子は、ある日上流階級の婦人方で構成される社交クラブ「サロン・ド・シヤリテ」の代表片桐枝美子から、クラブの活動の一環として、「サロン・ド・シヤリテ」のメンバーが施設の子どもたちの一日母親となるという申し出を手紙で受け取る。園の方針に照らして、丁重にお断りしたところ、片桐からは「私たちの厚意を受け取らないのは傲慢である。」との返事があった。次の文章はそれに対する小原園長の返信である。

お手紙ありがとうございます。わたしの筆の拙さがみなさまのご立腹を招いたようで、ほんとうに申しわけございません。わたしの言いたかったのは、ことばは熟しませんが、①善意の権力というようなことで、こんども上手に説明できるかどうか自信がなく、便箋を前にだいたい長いあいだ考え込んでしまいました。が、そのうちにふと、十二、三年前にある東京の女子大の校友会雑誌に、わたしのいまの気持ちをほとんど完璧に代弁してくれる小説が載っていたことを思い出し、修道院の屋根裏の物置のトランクの中から持ってまいりました。お忙しいところを恐縮ですが、ここにその小説の部分を切り取って同封いたしますので、ひと通りお読みになってください。

創立三十周年祭記念創作募集第一席

桃

舟倉道子

東京のある女子大の児童文化研究会の一行六名が、東北でも最も遅れているといわれる寒冷地の小村の村役場に辿りついたのは

七月のとある夕方のことだった。

(中略)

<sup>\*1</sup>老吏員の用意してくれた役場の名入りの提灯<sup>ちようちん</sup>で道を照<sup>てら</sup>して先導しながら、村長は女子学生たちに言った。

「あんたがたが村へ見えられたということは、こりや②この村にとつて大した事件でやんすよ。というとお大袈裟<sup>おおげさ</sup>な男だとお笑いに  
なるかも知れんがこれは誓<sup>ちか</sup>つてほんとうで。一年に一度か二度、県庁から巡回映画班<sup>じゆんかい</sup>がまわってくるぐらいで、村の連中にとつち  
や人形劇を見るなんぞ生<sup>うま</sup>れてはじめてのことなんでやんすから……」

「でも、テレビはあるでしょう」

リーダーの質問に村長は提灯<sup>ちようちん</sup>を横に振<sup>ふ</sup>つて、

「NHKは日本全土の九十八パーセントを電波で覆<sup>おお</sup>つたと豪語<sup>ごうご</sup>しとるが、この村は残り二パーセントの最難聴<sup>なんちよう</sup>地域のひとつなんじ  
やて。四方八方山ばかり、テレビ塔<sup>とう</sup>を三つも四つも立てないとこの村には電波は届かんという話だわ。じゃからこの村で自慢<sup>じまん</sup>でき  
るのはうまい空気と小鳥の囀<sup>さえず</sup>りぐらいなものよ、③いまのところは……」

「まあ、きれい」

そのとき、だれかが感嘆<sup>かんとん</sup>の声を放<sup>はな</sup>つた。

「ねえ、みんな空を見て。世界中の宝石をひとつ残らず集めて、それを全部、空に貼<sup>は</sup>りつけたみたい」

たしかにそれは美しい星空だった。④フラネタリウムでしか、星の輝<sup>かがや</sup>きを見たことのない娘<sup>むすめ</sup>たちは、しばし立ちどまって、光  
の洪水<sup>こうすい</sup>に心を奪<sup>うば</sup>われていた。思わず手を伸<sup>の</sup>べて星を掴<sup>つか</sup>もうとした女子学生もいた。

「きれいな星空だことはたしかだ」

村長は提灯<sup>ちようちん</sup>の火で煙草<sup>たばこ</sup>をつけながら苦笑した。

「だけでも、わしらは星の光を吸<sup>す</sup>つて命をつなぐわけには行かねえんだわ。ずーっと昔からこの村は炭焼きで喰<sup>く</sup>ってきたが、それ

はもうはやらん。なんとかして新しい方途を見つけないとどうにもならんところまで村は追い込まれとるんでやんして、村長としても頭の痛えところだべあ。おっと足許さ気を付けて。小川が流れておりやんす。小川を渡ればわが家でさ」

村長の家で出た夕食は、干わらびと干ぜんまいの味噌汁に、干にしんと昆布の煮付で、村の貧しさがこの夕餉からも窺われるようであった。

夕食後、女子学生たちは、明日の公演に使う胴使い人形を組み立てたり、背景幕の皺をのばしたりしはじめたが、ふとひとりが言った。

「重い人形や道具を担いで山道を登っていたときは、どうしてあたしはこんな地の涯みたいなところへ来てしまったのかしら、と正直いって後悔していたのよ。こんな苦勞をすると知っていたら、海の家なんかでアルバイトをしていた方がよっぽよかった、お金が稼げてその上遊べるし、なんてね。でも、やはり来てよかった。だってすてきな星空が見れたんだもん。ほんとうにこのへんは天が近いのね」

「明日のいまごろは、その十倍も来てよかったと思うはずよ」

人形の胴串の針金をまっすぐにのばしていたリーダーが言った。

「あなた、公演旅行に参加したのははじめてでしょ。だからわからないでしょうけど、わたしいまから予言してもいい。児童文化に飢えた貧しい子どもたちが人形劇にわれを忘れて夢中になっている光景を自分の眼でたしかめるときの喜び——。その喜びは一生忘れられないものになるはずよ」

そのとき、まただれかが感嘆の声をあげた。

「流れ星だわ」

六人の女子学生たちは息をのんで光の尾を見つめ、それが消え去ったあとも、長い間、夜空から目を落そうとしなかった。びつくりするほど近くで、杜鵑が一声啼き、続いてどこかで、山竹の裂ける音がした。

あくる朝、六人の女子学生たちは、数十数百の小鳥たちの啼き声で目を覚した。

小川の水で洗面を済ませた六人は村長の家のまわりを散歩した。村長の家の裏手は痩せた畑で、畑の向うが小学校になっており、畑の中央に、貧弱な桃の木が一本、⑤朝の陽光を浴びて金色に輝く実を十個ほどつけて、立っていた。純白の地に淡紅色のぼかしを浮びあがらせた桃の実は、六人になんとなく、この寒村にふさわしくないという印象を与えた。リーダーは手近かの桃を掌で包みこむようにして触った。

「熟しているみたいよ。とても柔らかい」

他の五人も桃の実を指で弾いたり、つまんだりした。

「これ勝手にもいでたべちゃったら、村長さんに叱られるかしら」

だれかがそんなことをいいながら、もう桃をもいでしまっていた。リーダーも桃をもぎ、両手の掌でごしごしこすった。

「⑥叱られるもんですか。去年、山形を公演旅行したとき、やっぱり宿舎の隣に洋梨がなっていてね、無断でたべて、あとで洋梨おいしかったわと言ったら、帰りに持ち切れないほど洋梨をくれたわよ」

もうすでに六人は六個の桃を手に使っていた。一口、がぶりとやっけてリーダーは果汁が多いのに驚いた。そして口尻を掌で拭いながら言った。

「おいしいわよ。とても甘い。ただ、繊維質がずいぶん多いわ。まあ、中級品でとこね」

若い娘たちの健啖はたちまち桃の木を裸にした。二個たべたものもおり、一個しかたべられなかったものもいたが、一個しかたべられなかったものは、二個たべたものの幸運を羨んだ。

六人は、それから、学校に機材や人形を運び、教室の窓を暗幕で覆い、にわか仕立ての人形劇場をこしらえた。作業中にとどき、歯をさせる音がしたのは、桃の果肉の繊維質が、だれかの歯に引っかかっていたせいであろう。

あらかた準備が終って、朝食になった。リーダーが、村長さんの姿が見えないけどもうお出かけですかと、村長の妻に訊いた。

「へえ、ついさつき役場へ行きやした」

村長の妻は、六人に茶を注ぎながら答えた。

「なんでも、昨夜遅く役場に県庁から電話があつて、急に偉い技官の先生が今日の午後、この村さおいでなさることになつたとかで、今朝はずつと役場さ出はつて行つたきりで……」

「わたしたちの公演のことが県庁にまで伝つたのよ」

リーダーは冗談を言った。

「それでわざわざ県庁から見物にやってくる……」

女子学生たちがリーダーの冗談に自負心をすこし擦られてにこにこしていると、⑦村長が踊るような足どりで戻つてきた。村長の妻が、

「おかえりやんし。朝飯どうしやす」

とたずねる。しかし村長はそれには答えず、炉端にどつかと腰を据えると、煙草に火をつけうまそうに一服喫いつけた。

「どうなさつたのかね」

「どうとうくるぞ。県庁から技官がやってくるぞ」

「それはいま奥さんから伺いましたわ。でも、村長さん、ずいぶん嬉しそうね。技官がくるのがどうしてそんなに……」  
リーダーにみなまで言わせず村長は喋りはじめた。

「わしは若い頃、兵隊にとられて中国大陸に行つとつたんだが、上海に上陸して最初に口にしたのが桃だつたんでやんす。上海水蜜というやつでねえ。汁気も甘味もたつぷりで、世の中にこんな旨いもんはまずふたつとあるまいと思つた」

どうやら長い話になりそうな気配である。六人の女子学生は、両手を後に身体を支えたり、寝ころがったりして、村長の話に聞き入つた。

「復員\*3して帰ってきてからも、どうしてもあの桃ももの味が忘れられねえ。それでいつそのこと自分で桃ももを作ってみようということになったんでやんす。ところが、みなさんは知つとられるかどうか、桃ももには耐寒性たいかんせいがない。寒いところじゃ育ちにくい。日本じゃ、山形、宮城以北では無理ということになつとる。だもんで失敗の連続でなあ」

汚れた食器をまとめて小川の洗い場に運ぼうとしていた村長の妻が、ここで合の手を入れた。

「ところが桃ももぐるいなどと陰口かげぐちを叩かれて、ずいぶん肩身かたみの狭い思いをしたもんでやんす」

「けど、わしや挫くじけなかつた。寒さに強い桃ももの台木を探して日本国中ほつき歩きましたわ。そりや何度もやめようと思つた。が、これはわしひとりの道楽\*4じゃねえ。村のためにもなることだと考え直し、とうとう山形で『カネナカモモ』という寒さに強い桃ももの台木を見つけた。台木が見つかりやあとは根気と丹精たんせいでねえ。その台木にいろんな種類の桃ももの芽つぎ、切りつぎをし、四年前にとうとうわしは、これならこの村でも桃ももの栽培さいばいが出来るだろうという品種をつくることに成功しやした。裏の畑に立っているのが、その桃ももの木なんだが……」

村長は二本目の煙草たばこに火をつけた。

「この村の生業はいまのところたいしたものはないが、ここで桃ももが育てば、村の暮くらしはすこしは楽になる、そう思いつめて辛抱しんぼうしたのが実つたんでやんす。桃ももの木は一昨年三個、昨年六個、そうして今年は十個の実をつけた。今年のはまだ食たちやいないが、昨年のも一昨年のもいい味でねえ。そりや、あの上海水蜜しゃんはいすいみつにはとても太刀打たちうちできないが、商売には充分じゅうぶんになる味でやんした。さて、しかしでやんす。村の生業にするにはまず金がある。そこで県に補助金の申請しんせいをしたら、県の技官ぎくわんがこう言つたもんだ。『なにを馬鹿ばかこく。この県で桃ももの実みがなるわけねえでねえか』。わしはだから言い返してやつた。『わしが馬鹿ばかかどうか、桃ももがなっているかどうか、あんたの目ン玉でたしかめてから決めてもらいてえ』とね」

村長は心から嬉うれしそうに笑つた。六人の女子学生たちはもう寝ころんではいなかった。⑧六人は正座し、リーダーは正座した上に蒼白そうはくになつて震ふるえていた。

「で、きょう技官がはるばるやってくるってことになったわけ。裏の桃の木を見、あの桃の実に触れ、桃の実を喰ったら技官殿も腰を抜かし、補助金の申請を認めてくださるにちがいない。いつか近いうち、この村は桃源境になるんでやんす。…はて、みんな、どうなすったかね。いやに改まっちゃまって」

このとき、村長の妻がばたばたと土間に駆け込んだ。

「ねえよ、桃の実がねえよ。あんたあ、桃の実がねくなってこったよ」

(中略)

…：賢明なみなさまのことですから、もうわたしがなにを言いたいのか、おわかりになったはずです。村長にとって、村の人たちにとってその桃がどういう意味を持っているのか、そういうところをきちんと踏まえていない善意などは、ものの役にも立たない。それどころかかえって邪魔になる…。この小説の舞台となった東北の寒村へわたしも足を踏み入れたことがありますので、しみじみそれがわかります。ええ、もうここでもかも白状してしましましょう。この小説はほとんど事実です。作者の舟倉さんは人形劇研究会のメンバーのひとりで、自己批判のためにこれを書いたといっていました。そして、この生意気なリーダーはわたしです。それからのわたしはへこの桃は自分にとつてはただの桃だけれど、相手にはどんな意味があるのだろう」ということばかり考え、とうとう童貞女になり子どもたちの世話をするところまで、深みにはまってしまいました。それでも⑨「桃」の向こう側がどんなかまだよくはわかりません。おそろく一生、わからぬだろうとおもいます。

くだいようですが、「一日母親」の件はもういちどよくお考えくださいますように。

八月二十八日

白百合天使園長

テレジア小原純子

片桐枝美子様

( 『十二人の手紙「桃」』 井上 ひさし )

〔注〕

- \* 1 老吏員ろうりいん 〓 年をとった役場の職員。
- \* 2 健啖けんたん 〓 盛んに食べること。多く食べること。
- \* 3 復員 〓 招集を解かれた兵士が帰郷すること。
- \* 4 道楽 〓 本職以外の趣味しゅみなどにふけり楽しむこと。
- \* 5 土間 〓 家の入り口で床ゆかを張らず土のままになっている所。
- \* 6 ねくなつて 〓 なくなつて。
- \* 7 童貞女どうてい 〓 修道女。

問一 ―線①「善意の権力」とありますが、ここでの意味として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 他者に対して善意を示す自分たちの姿に酔よいしれ、自分たちを批判する言動を悪と決めつけ、必要以上に攻撃こうげきすること。
- イ 精神的に豊かな生活を認めようともせず、物質的に豊かであることに優越感ゆうえつを持ち、経済的に貧しい者を見下すこと。
- ウ 善意を大上段に振りふかざし、ひとりよがりで相手の迷惑めいわくを考えず、相手に有無を言わせず自分の思いを押し通すこと。
- エ 一度相手の要望をかなえたことを恩に着せ、その後は相手の都合を考えず、自分の思いを相手に押しおつけていくこと。
- オ 自分の行動は自己満足に過ぎないと知っているが、相手が断りにくいということにつけこんで善意を押しおつけること。

問二 ―線②「この村にとって大した事件」とありますが、この表現から分かることとして最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア この村が、集落として発展することがなく、限界むかを迎えた村であるということ。
- イ この村が、よそ者を受け入れることがなく、閉鎖へいさ的な村であるということ。

ウ この村が、若者が訪れることなどなく、活気のない村であるということ。

エ この村が、残っている若者がとても少なく、過疎化に苦しむ村であるということ。

オ この村が、都会の文化に触れることもほとんどなく、遅れた村であるということ。

問三 —線③「いまのところは……」とありますが、この時の村長の気持ちの説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア もうすぐ長年の夢がかない、我慢できるものが新たにこの村に根付くはずだという思い。

イ やがて機械文明における開発がこの村を侵食し、この星空さえなくしてしまうという思い。

ウ ようやく自分や村人たちの長年の苦勞が報われ、新しい産業が軌道に乗ったという思い。

エ いつかはこの村の魅力を見せつけ、田舎を軽んじる都会の人々の鼻をあかしてやるという思い。

オ 近いうちに豊かな自然を強みとして、観光業を中心にした豊かな村に再生させたいという思い。

問四 —線④「プラネタリウムでしか、星の輝きを見たことのない娘たち」とありますが、ここに描かれている女子学生の姿の説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 牧歌的な自然に触れることで心が躍り、都会から離れた非日常的光景を心から楽しむ姿。

イ 初めて見る大自然の雄大さに感動し、その美しさにただただ圧倒されている従順な姿。

ウ 時に人間に大きな被害をもたらす自然の力を確認し、ひれ伏し祈りを捧げる真摯な姿。

エ 寒村で暮らす厳しさを知らず、都会が失った美しさに見とれるだけの無邪気な姿。

オ 都会では見られなくなった星空に目を奪われながらも、この村の貧困に同情する姿。

問五 ―線⑤「朝の陽光を浴びて金色に輝く実」とありますが、この表現の説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 耐寒性のなさが改良され、東北で育った新しい品種の桃の強さを暗示している。

イ 寒村を見下し、都会の便利な生活に価値を置く女子学生の優越感を暗示している。

ウ ここは東北の寒村で、注目すべきものが何もないという寂しさを暗示している。

エ この桃の実が、やがて村に豊かな経済をもたらすという期待を暗示している。

オ なかば諦めかけていた桃栽培の事業を成功させた、村長の強運を暗示している。

問六 ―線⑥「叱られるもんですか」とありますが、リーダーはなぜこのように言うのですか。その理由として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分たちがこの地に恩恵をもたらす存在であるという、誤った自負心を持っていたから。

イ この桃の味をほめてあげれば、きっとお土産をもらえるという期待を持っていたから。

ウ この桃は公演の報酬として、私たちのために残されていたものだという傲りを抱いていたから。

エ この桃が誰かのものであっても、後でお金を払えば許されるという甘さを持つていたから。

オ 木になっっている桃を生まれて初めて見て、食べてみたいという強い欲求を抱いていたから。

問七 ―線⑦「村長が踊るような足どりで戻ってきた」とありますが、この時の村長の様子の説明として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 技官が桃を見に来るといふ連絡をもらって、失礼のないように準備をしなくてはならず緊張する様子。

イ 長年の夢がいよいよかなうといふこれ以上ない歓喜に浮かれ、足取りさえも危うくなっている様子。

ウ 人に見せられるまでに桃が育ち、長い間陰口を言っていた村人たちの驚く姿を想像して喜ぶ様子。

エ 長年追い求めてきた夢の実現まで、あと一歩のところまで来たという喜びで舞い上がっている様子。  
オ 品種改良を重ねて時間をかけて育てた桃が公に認められ、資金援助にまでこぎつけた達成感に浸る様子。

問八 | 線⑧ 「六人は正座し、リーダーは正座した上に蒼白そうはくになって震えていた」とありますが、それはなぜですか。その理由を具体的に五十文字以上八十文字以内で説明しなさい。

問九 | 線⑨ 「『桃』の向こう側がどんなかまだよくはわかりませんが、この言葉が意味することとして最も適当なもの

ものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 桃は村にとって本当に意味のあるものだったのかどうかは、いまだに分からないということ。

イ 自分にとってはつまらない物でも、それを大切にして生きている誰かが必ずいるだろうということ。

ウ 相手の身になって考えることには到達点はなく、分かることは永遠にあり得ないだろうということ。

エ 人の気持ちを大切にして思いやりを持って生きるとは、かえって誰かを傷つけているということ。

オ 自分がかつて犯した過ちは決して許されることはなく、生涯を神に捧げるしかないということ。

